

ひの 研究・研修 ニュース

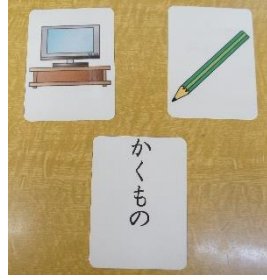
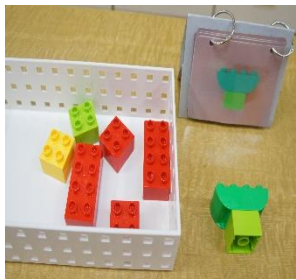
令和2年度校内研究 研究通信 No.4 2021. 3. 3

じりつかだいち - む かつどうほうこく 自立課題チームの活動報告

こうなんだい てい - ちぶろぐらむ じりつかだいじっせん 港南台ひの TEACCHプログラムの自立課題実践

本校では、有志の集まりで「自立課題チーム」という勉強会を行っています。このチームは結成して3年目となり、メンバーは初年度5名、2年次7名、3年次は13名と着実にひのの中で広がりを見せています。

今年は、3名の児童生徒のアセスメントを取り、子どもの学習スタイルや実態の把握をしました。TEACCHプログラムでは、T-TAPという検査があります。本校では、T-TAPを導入していないので、以前、オフィスぼんの中山清司さんと取り組んだ児童の実態把握のためのアセスメント課題を参考に、本校独自の教材を利用しています。文字や数の理解、色や形や長さの理解、マッチング、プットイン、部品の組み立て、分解、整理などの活動を通して、「好きなこと・嫌いなこと」、「できること、できそうなこと、できないこと」、「理解の仕方、強み」などを把握し、学習内容の検討、教材の工夫、学ぶための適切な環境づくりを行いました。



本校のアセスメント用教材の一例

がくしゅうないよう けんどう 学習内容の検討

自立課題は、本人の理解の仕方に寄り添い、好きな活動や関心のあるものを軸に教材を用意するので自発的な学習ができ、自分でできたという達成感や、やる気につながったりします。

アセスメントで興味関心のある活動、一人で行えることを把握できたらそれを生かした教材を用意して自立課題で学習します。「できそうなこと」については、一人で行えるように「得意な学習の仕方」を活用し、教員と1対1で学習して身につけます。自立課題チームでは、アセスメントをとった後に自立課題用の教材の選択と、教員と一緒に学習するスキルアップ用の教材の検討・作成を行い、必要な学習を明確にしました。

活動計画

担任の願い

時計を読むようになってほしい 文字をかけるようになってほしい

得意なこと・好きなこと (アセスメント+α) 文字・時計のスキルの現状把握

↓

自立課題の活動検討+誰が作る

1対1課題でどんな視点で身につける

この表を使ってアセスメントで得た情報を整理し、一人ひとりの学習計画を立てます。

きょうざい くふう こうぞうか さいこうぞうか
教材の工夫（構造化・再構造化）

教材を見たときに何をしたらよいのかが視覚的に伝わるのが大切です。ブロックの組み立てなどでは、組み立てて写真を写真カードにして示すことや、完成品を入れる場所を明確にすることも教材の工夫です。長さの違う棒を分類するときには、見本の棒の色を変えて示すことで、何に注目して分類したらいいのかわかるようにすることも教材の工夫です。このような工夫することを構造化といいます。構造化することで教員からの支援を受けずに一人で学習することにつながります。また、用意した教材が本人にとって適切でなかった場合は、どこを改善したらよいのかを再検討し、作り直しをします。これを再構造化といい、本人のスキルと理解に合わせていくことが必要となります。この教材づくりをメンバーで分担し、作った教材で実際に学習したあとに教材の作り直しをしました。



なが ちが ぼう ぶんるい
長さの違う棒を分類するのだい。
みほん ぼう を 黒から 赤に変えて、
かつどうちゆう ちゅうちく
活動中に注目しやすくした。

かめら を 組み立てるのだい。工程
ごとに必要なブロックを分けるこ
とで、ピースを探しやすくした。

ぶろっく の 組み立てかだい。出来
上がった作品を入れる場所を枠で
示すことで終わり方を伝えた。

まな ぶための適切な環境づくり（ワークシステム）

学習する場所に移動したら、何をどのくらいやるのか、どうなったら終わるのかを環境から把握できるようにすることが必要です。棚に用意された課題を上から順番に行う、マークや番号でスケジュールを伝え、自分でそのスケジュールを見て行うなど、本人の理解に合わせて示します。学習した教材をどこにしまうのかも、本人の活動のやり方に合わせて調整します。また、集中して取り組める量の把握をして適切な量に調整もします。周囲の様子や鏡などが気になる場合は、座席や棚の位置を工夫したりパーティションで視界を遮ったりすることも必要です。

ワークシステムの一例 ↓



きじょう すけじゅーる の ▲ マーク を 取り、たな おか けた ケーす に 入れ
て、その課題に取り組み、終わったら棚に戻す。同じように次の★
マークを取り、活動に取り組んでいく。

かつどう お 終わったら、休憩コーナーに
移動し、過ごす。学習場所からの
移動も教員の指示を受けない。

じりつかだい なが 自立課題をするための流れ

アセスメント

好き・嫌い 得意・不得意
できる・できそを把握

構造化・ワークシステム

好き・得意・理解の仕方を利用し、教材・環境づくり

再構造化

本人がより取り組みやすい
教材・環境に作り直す

できているスキルだけを継続して取り組むのではなく、できそうなことを「本人の学習スタイル」に合わせ、好きなものや得意なことを取り入れながら教員と1対1で学んで身につけ、一人のできるようになったら自立課題の活動に組み込んでいくことが必要です。

また、作った課題が適切なのかどうかを検討して、本人が取り組みやすいように作り直すことも大切になります。

ていーちぶろぐらむ しょうかい TEACCHプログラムの紹介

アメリカのノースカロライナで始まった自閉症の文化（学習スタイル）に合わせ、わかりやすく環境を整える教育方法・支援方法です。早期の診断から成人期の就労、余暇支援に至る包括的なサポートプログラムのことをさします。TEACCHプログラムの目標は「自閉症の人たちが地域でできるだけ自立して生活できるように、能力を最大限に引き出すこと」であり、その結果「自閉症の人とその家族を生まれたときから死ぬまでの生涯をサポートする」ということです。自閉症者本人を治療しよう、変えようというのではなく、自閉症の人に合った環境を構築することにより、自閉症の人の社会適応を促すという方法論をとっています。

ていーち としよ TEACCHを知るためのおすすめ図書

「自閉症支援の最前線 さまざまなアプローチ」エンパワメント研究所

「自閉症のひとたちへの援助システム TEACCHを日本でいかすには」朝日新聞厚生文化事業団



※ご興味ある方、連絡帳などでお伝えいただければお貸しします。（小学部 山本晋介まで）

じりつかだいちーむ めんばー かんそう
 自立課題チーム メンバーの感想

今まで、児童が理解しやすい教材を作ってきたつもりでしたが、何度学習を繰り返しても児童の理解にながっていないようで不安がありました。今回自立課題をするにあたり、アセスメントを取ったところ、担当の児童が「色の識別」「マッチング」「ブロックを使った作業」「めくり式の手順表の理解」が得意だと分かり、それを含めた教材を作ったところ、児童の学習の理解が深まり、集中力が高まりました。アセスメントの重要性、再構成化の大切さを感じました。

自立課題チームでは、児童生徒の学習の様子をみて、アセスメントをとりました。子どもの好き・嫌い得意・不得意に着目しながら学習の様子を観察することで、今まで気づくことができなかった面にも着目できるようになってきました。担当生徒のアセスメントをチームの先生方と一緒に取ったときには、生徒が理解できている部分と、まだ理解が足りない部分明確になり、教材の工夫につなげることができました。

クラスや学部を超えていろいろな意見や考えを共有でき、とても有意義な活動になりました。教材づくりや環境設定をするときには、自分一人では考えつかなかった意外性のある工夫やアイデアがいくつもありません。

たくさんの方で児童生徒について一緒に考えることの大切さを改めて感じました。また他学部の学習の様子や児童生徒の実態を知るととても良い機会にもなりました。

実際の課題中の様子を見てアセスメントを取ったり、教材を作成したりと実践的に学べた1年でした。アセスメント時にその児童の強みは何か、好きな活動は何かをチームで話し合うことで、自分では気づくことができないことに気づくことができました。自立課題チームで学んだことを担当する児童でも実践し、以前より児童自身で課題を進められるようになったのが嬉しかったです。今後も児童が分かりやすく楽しく課題をできるように学習していきたいです。



れいわ ねんど
 令和2年度
 自立課題チームメンバー

ひだりした いたとう やまぐち
 左下から 伊藤の 山口
 かの やまもと なかやま やまさき
 菅野 山本し 中山 山崎
 ひだりうえ おおた かだた
 左上から 大田 門田
 ながしま えいとく たけうち
 永島 永徳 竹内

この他に
 しょうがくぶさすもと こうとうぶさきとう
 小学部杉本・高等部佐藤
 以上のメンバーで1年間
 とりくみしました。

横浜市立港南台ひの特別支援学校

Let's Study
 for our Children.

研究研修係

小学部 : 金内 永島 白高 福井 山本し
 中学部 : 藤田
 高等部 : 小早川 佐藤 野田